

春期講座の第三回は、『尺には尺を』に続く問題喜劇として『終わりよければすべてよし』を取り上げました。1603年に王位に就いたジェームズ一世は、エリザベス一世よりも気前が良く、国王一座となったシェイクスピアの劇団は宮廷での上演回数が増えます。1604年には『尺には尺を』と『オセロ』、1605年には『終わりよければすべてよし』と『リア王』が上演されました。神父様は、『オセロ』と『リア王』が天才的な劇なのに対して、『尺には尺を』と『終わりよければ』は面白くない喜劇ですと辛口のコメントをなさいました。シェイクスピアは、同じ時期であっても劇の仕上がりにむらがあるとおっしゃった神父様は、実例として、『アントニーとクレオパトラ』は有名だが『アテネのタイモン』は知名度が低く、著名な『ハムレット』に対して『トロイラスとクレシダ』は人気がないと説明くださいました。

神父様は、1604年から1605年に創作された四つの劇の女主人公は聖母マリアを思わせる女性で、『終わりよければ』のヘレナもその一人と説明されました。ところが、その後、1608年までの劇には理想的な女主人公は登場しないばかりか、『アテネのタイモン』のように、女主人公が全く登場しない劇さえあると指摘されました。

問題喜劇に話を戻しますと、『尺には尺を』同様、『終わりよければすべてよし』もカトリック的な劇でございます。女主人公のヘレナは奇跡を起こし、さらに、サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼に旅立っています。

劇の冒頭、ヘレナは、身分の違いを意識しつつも、ロシリオン伯爵の遺児バートラムに恋い焦がれています。ところが、バートラムは身分が低く貧しい医師の娘には全く関心を示さず、フランス王の宮廷に出発してしまいました。ヘレナは、バートラムの後を追うように、病氣療養中のフランス王のもとに出かけます。

医師団は、フランス王の難病にさじを投げていました。ヘレナは亡き父の残した処方薬で王の病気を治す代償として、バートラムを獲得したいと密かに願っています。ヘレナは、自分の願いを成就するために、ペーローレスには自由意思の重要性を強調しますが、フランス国王には天の恵みを強調し、自分自身の立場を曖昧にします。

この時代、イングランド国教会は、カトリック教会が信じる奇跡を否定していました。シェイクスピアは、国王の平癒にヘレナの薬の薬効に加えて、神の恩寵の奇跡を重ねています。奇しくも、1604年は、ベルギーのブラッセルで聖母マリアの奇跡が報告された年だったと神父様が説明してくださいました。

ヘレナは王の病気を治した褒美として、夫をフランス王に望みます。婿選びの儀式で、ヘレナはロシリオン伯爵バートラムを選びました。バートラムは、身分の低い娘ヘレナとの結婚を断固拒絶します。けれども、王は、威信をかけてバートラムに厳しく結婚を

迫ったため、バートラムはやむなく結婚式を挙げました。けれども、式の直後、バートラムはフィレンツェの戦地に赴きました。

バートラムは、「おまえが私の指から抜けるはずのない指輪を手に入れ、私を父親とする子供を産むときが来れば、私を夫と呼ぶがよい。だが、そのような時は決して来ない」という残酷な内容の手紙をヘレナに送ります。シェイクスピアは、『ヘンリー五世』、『リア王』でも使った「放蕩息子」のたとえ話を利用し、バートラムを「放蕩夫」として描くと神父様が解説なさいました。夫に見捨てられたヘレナは、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼に旅立つのです。

この劇の材源の女主人公は、ジレッタという名前でした。ところが、シェイクスピアは、巡礼に旅立つ女主人公に相応しい名前に変えたのです。コンスタンティヌス一世の母で聖地エルサレムに巡礼し、廃墟で聖墓を発見した聖ヘレナにちなみ、シェイクスピアはヘレナと名付けました。

劇中、ヘレナは、巡礼先のスペインには行かず、バートラムのいるフィレンツェを目指すのです。フィレンツェでは、バートラムが美しいダイアナに心奪われ、ベッドに誘っていました。ヘレナは事情をダイアナの母親とダイアナに打ち明け、協力を願います。そのおかげで、バートラムの指輪を手に入れてもらった上に、純潔を大切に思うダイアナの身代わりとしてヘレナはバートラムとベッドを共にしました。劇中、ヘレナは二枚舌を使い、意味が曖昧に受け取れる発言をしています。これは、イエズス会士同様、罪なき人が自衛手段として用いる手立てなのだと神父様が解説くださいました。

その後、ヘレナの死亡を告げる知らせが、バートラムに届きます。妻の死の報に安堵し、バートラムはロシリオンの自宅に戻ります。フランス王もロシリオンに立ち寄り、バートラムのこれまでの愚行を許し、重臣の娘との結婚を勧めました。その時、ダイアナが出現し、結婚を前提にベッドを共にしたのに、バートラムは結婚の約束を破ったと王に直訴しました。

バートラムが絶体絶命に陥った時、バートラムの子供を身ごもったヘレナが登場し、バートラムの指輪を見せます。驚く人々を前にして、ヘレナはバートラムの課題を完全に果たした以上、妻と認めて欲しいと願うのです。バートラムは課題を達成したヘレナに愛を誓い、「終わりよければすべてよし」。不安を残しつつ、劇は幕を閉じます。

第二部

質問 1. 問題喜劇に関して

・問題喜劇は、シェイクスピアのソネット 90 番で描かれたシェイクスピアの憂いを反映しているのでしょうか？

お答え：ソネットの制作時期が曖昧である以上、ソネットの問題が劇とどれほど関係があるのかは誰もわかりません。したがって、ご質問に答えることは不可能です。

質問 2. 「ベッドトリック」について

- ・「ベッドトリック」は聖書からヒントを得たのでしょうか？

お答え：旧約聖書のヤコブとレア（Jacob and Leah）の可能性は考えられます。

最後に第一幕第一場のヘレナのセリフ “Our remedies oft in ourselves do lie...”、第二幕第一場のヘレナのセリフ “It is not so with him...”、第三幕第四場の伯爵夫人のセリフ “What angel shall...” を朗読して、第三回が終わりました。